

居られるか知らぬけれど、海国少年社長は既に引受けて居られぬらしい。(中略)先生近頃俳壇に復活されたのは悦ばしい。

とあって、前記大正11年1月号〜5月号の奥付は全く名前だけのものと考えてよいだろう。

厚一はこの年8月中に伊豆修善寺に行き、翌11年2月上京、弟亮之助が借りておいてくれた下目黒の家に落ち着くまで、そこに引きこもったと思われる。(小品「雪もよひ」)

なお、大正13年8月24日付の鈴木三千代宛書信に、この夏の苦しみを率直に述べた個所がある。

9月3日・曲水伊豆狩野川支社例会に遠来の客として参会、2句。

10月。「曲水」(7-3)、近詠9句。

12月・小品「雪もよひ」(「曲水」8-1)にこのころの心境が写されている。

●下目黒時代 (大正11年より終焉まで)

▽大正11年 (1922)

1月・新年を伊豆修善寺温泉、新井旅館で迎える。

9日・寒燈吟社の句座(於流觴居)でよしを他共選の1句があるが、句のみの参加と思われる。

2月、上京。東京府下目黒369番地の仮寓におちつく。

青木よしを蔵、厚一手書きの見取り図あり。この仮寓で厚一は、震災を経、父の死を見送り、そしてみづからの大正14年5月20

日の終焉まで住んだ。(「曲

水」(10-9)川越苔雨「長

頸子君と私」は、下目黒時

代のよきスケッチである)

3月1日・寒燈句会 於

玩亭居。玩亭、苔雨、長頸

子共選の2句。

7日付郷里の末弟春樹宛ハガキ。写真を焼付けた印画紙をそのままハガキとしたもので、表書き下の文面はローマ字で書かれている。

「曲水」(7-3)。巻頭の水巴選「近詠」に9句。

弟欣也、旧東大経済学部入学。

4月・「曲水」(7-4)。水巴選「近詠」に5句。小品「銀

貨」を載せる。

翌月にかけて曲水編集に鋭意たずさわる。

5月・「曲水」(7-5)。句帖2句、巻頭近詠に5句。小品

「昨日の人々」載る。「誰れ彼れ曰」欄に俳句の前書について

書く。黒田呵雪の寒燈吟社同人評に長頸子評がある。編集後記

に、選者を長頸子として「季題寸言」欄を復活する旨水巴記す。

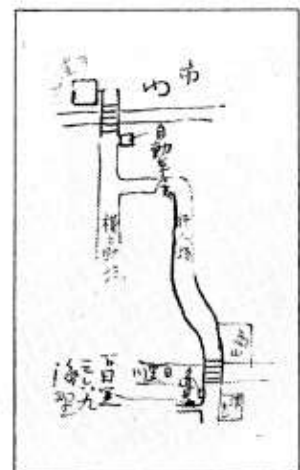
6月・吟社6月例会。席題「若葉、梅雨」に6句。

「曲水」(7-6)。巻頭近詠5句、句帖に7句。又「季題寸

言復活に際して」を書き、この欄の性格づけ及び選者としての抱負を述べる。

諏訪かげよし、厚一の肖像画(巻頭カラー写真参照)を画く。

7月18日・「水巴句帖」出版記念会が、俳壇的な催しとして上野精養軒に開かれる。長頸子に「賀宴の卓」の一文その他



厚一手描きの下目黒宅略図